柴北川プロジェクト通信　７号（学校活用編）

平成２１年１２月５日（土）・６日（日）

１.第２回「長谷地区のまちづくりを話し合う会」の開催

山桜調査第２弾と併行して、12 月５日に「長谷地区のまちづくりを話し合う会」を開催しました。

今回は、前回の話し合う会で検討した長谷地区の宝物、問題点から大きく３つのテーマに絞って、さらに検討を進め、今後の具体的な活動に向けて話し合いました。

■　中高生を含む 37 人が集い、活発に議論。

山桜調査を終えた一行は、黒松生活改善センターに戻り、柴北レディースの皆さんによるお手製の料理でパワーを注入した後、第２回「長谷地区のまちづくりを話し合う会」の準備に入りました。（夕方から赤星副会長も参加）

前回の「話し合う会」では、これまで長年にわたり地域のコミュニティ活動の場を提供してきた長谷小学校の体育館をお借りして、広く当地区全体を見渡しながら長谷地区の宝物や問題点、さらに 10 年後の姿について議論しました。

「話し合う会」の様子

今回の「話し合う会」は、この長谷地区の宝物を活用しながら、地区の問題点を解消していくための具体的な手立てについて、少し深く話し合うことを目的としました。そのために、参加者があまり構えずに普段着のままで気軽に話し合える場として、会場を黒松生活改善センターに移し、時間も夕方 19 時からの開催としました。

土曜日夕方からの開催としたことで、住民の皆さんの週末の家族団欒の時間とかぶってしまい、参加者が前回より減るのではと心配しましたが、19 時前から続々と参加の方々が集まり始め、結局地元から 26 人の参加（共助研メンバーその他を加えて総勢 37 人）があり、その心配は全くの杞憂に終わりました。

特に今回は、若い中学生、高校生の参加が７名に及び、まさに老若男女が入り混じっての多様な階層による話し合いがもたれたことが特筆されます。豊後大野市役所からも、市の広報担当の女性が参加され、「話し合う会」の一部始終を取材していただきました。

各班の参加者（　敬称略。　　は、共助研メンバー）

赤組	原山英二、大塚勝枝、穴見克美、樋口貞男、八坂孝範、高木広記、足立比呂美、高木日向子、赤星文生、濱田康男、矢ケ部輝明
青組	大塚松信、安藤邦男、甲斐能美、後藤梅生、大塚義則、渡邊きみ子、伊藤千津子、二宮里桜、坂上観月、針貝武紀、幸野敏治、波木健一、森脇亨
黄組	穴見純一、渡邊雪法、大塚智代、高柳美子、三浦君重、安部裕士、大塚由紀、安部直樹、高木向明、木寺佐和記、玉田孝二、波多野建志

前回同様に参加者が３つのテーブルに分かれて座り、日頃顔を突き合わしている仲間が改めてこの

ような場で合流したことによる興奮のざわめきが冷めやらぬ中、渡邊事務局長（愛する会）より「今回は若者の意見も大いに聞きたい」と開会あいさつがあり、続いて大塚会長（愛する会）が主催者代表として「よりよい長谷地区の発展のために、大いに話し合いましょう」と呼びかけて「話し合う会」が始まりました。

■　まちづくりに向けた提案が続々

７時半から始まった組ごとの話し合いは、赤組が「長谷地区の特色を生かしたまちおこし・産業おこし」、青組が「まちとの交流（定住人口・交流人口を増やすために）」、黄組が「地区内のコミュニケーションの維持・育成（文化の継承など）」と別々のテーマで話し合うことで始まりました。

最初は少し硬い雰囲気もありましたが、中学生達の若い参加者による初々しい自己紹介もあって少しずつ場がほぐれ、次々とテーマに関する提案が出るにつれて真剣なまなざしの中にも笑い声が混じり、１時間の枠では納まらないような熱い議論の場に変わっていきました。

８時半に一旦、各テーブルでの議論を打ち切り、出された意見や提案を班毎の代表者が順に発表しましたが、中高生が発表する班もあり、参加者はそのひとつひとつにうなずきながら熱心に聞き入りました。発表された班毎の主な提案は次の通りです。

赤組テーマ：地域振興・町おこし・村おこし

●長谷地区へ呼び込むアイデア

- **山田地区をホタルの観光地として利用**
- **柴北川の利用（遊びなど）**
- **小学校跡地を施設などに再利用する**
- **三ノ岳を再び活動させる・三ノ岳で初日の出**
- **長谷の観光めぐりコースを考える**
- **自然を活かして芸術家を呼び込み、アートの村づくり**
- **春は桜、夏はホタル、冬は健康（ウォーキング、ジョギング）の名所にする**
- **四季折々の花づくりを通じて都会の人に来てもらう（桜、緑、紅葉など）**
- **はなれ古舎のような誰でも入られるようなお店をつくると人が集まる**
- **自然に触れ合う場として冒険の森などをつくる（学校の活用、公園の利用）**
- **長谷は景色がよいので、何か観光に結びつけたものをやって見たい（小学校跡地でシシ肉や野菜などを使った料理を出して人を集める）**

●長谷地区から発信・発送するアイデア

- **地域の物産、農産物を販売するショッピングセンター、加工センター、レストランで人を呼び込む**
- **イチゴ、椎茸、かぼす、米**
- **出身者に長谷の良さを宣伝、アピールしてもらう（長谷大使）**
- **紅葉、冬景色、桜、柴北川の季景をモチーフにした手作りのカレンダー作成を発信（子供や家族ぐるみで）**
- **おじいちゃん、おばあちゃんの子息さんに週末来てもらい、特産品のＰＲと介護支援を兼ねてサポートしてもらう**
- **外の人、農協の力を借りて他地区にない特産品をメールやインターネット発信する**

プロジェクト

- **情報発信が少ないので新聞に**
- **長谷地区宣伝チーム（ＣＭ）**
- **水田でのどろんこフットサル大会**
- **長谷地域だけでマラソン大会などのイベント　→いろんな所から人が集まる**
- **山ノ岳オリエンテーリング**

青組テーマ：まちとの交流　→　定住人口・交流人口

●広く宣伝
- まちの行事を全部知る
- 若い人を中心に伝える方法を考える（手作りの新聞・ブログ・ホームページ）
- 広報プロジェクトを編成する（ファンクラブ）

●今ある資源の活用
- 山桜を手入れして花いっぱいにしたい
- 農地に花植

●長谷の隠れた資源の発掘
- 山の辺の道
- 柴北堰に鯉を入れて観光の資源にしたい
- 栗ヶ畑城をメディア（テレビ、ラジオ）で宣伝する
- ホタル見学（見られる場所や時期を案内）

●イベント
- 黒松神楽、獅子舞が春、秋の祭りに行われるので、見に来てもらう
- 長畑、梅の花見に来てもらう
- 地域に伝わる文化（神楽、盆踊り）等を若い人に継承して行き、地域を活性化する
- 文化祭・収穫祭
- 運動場をグランドゴルフ場に

●農産物を販売
- ショップで椎茸販売
- 長畑地区の合鴨の方法をメディアに紹介する・鴨の焼肉
- 椎茸、かぼす、米、甘酒、野菜、こんにゃく

プロジェクト

収穫祭をテーマとした祭りを行う
- まちから来た人々とネットワークをつくっていく

黄色組テーマ：コミュニケーション　→　維持・育成

●どうしたら維持できるか・もっと良くなるのか
- 区長を中心に行う
- 集う機会をつくる・飲み会でコミュニケーションを増やす
- 木工教室（教えられる人が必要だが）・共同作業の機会をつくる
- 各種活動をつなぐ駅伝や運動会、ゲートボールなどを行う
- おとより（隣保班の行事）
- イキイキサロン（4 つの地区の社教の行事）
- 子供の活動を核とする

●何かに集中させよう
- 花火大会兼、合同同窓会
- 全地区集合で地区毎に盆踊り、獅子舞
- 地区対抗運動会（手作り弁当）
- 2 月 14 日の閉校式をきっかけにする
- ふるさと祭り級の祭りを行う（長谷小を使う）・大花見会

プロジェクト

実現性が高いと思われるのは、閉校式と並行して大花見会、運動会、祭りを行うこと
→小さい子供からお年寄りまで楽しめるという利点がある
→誰がこういった行事を動かすのかが問題（若い力、子供達？）

■　全体討議で、「長谷探検隊」が発足。

３つの班からの発表の後、波多野（共助研）の進行で全体討議を行い、班相互の意見交換や共通した提案に基づく当面のプロジェクトが話し合われました。

幸野（共助研）から、「地域を知るということが必要。何がどこにあるかという情報を発見するために、期間を限定し、長谷地区を徹底的に歩いてみては」と提案があり、赤星副会長（共助研）からも「歩きながらお年寄りの方と子供達が一緒に地域を捉えて、考えて、一つの物語として作って、コミュニケーションの輪を広げる、そういうやり方もいい。」と事例を挙げた説明があったところ、多くの方から賛意が寄せられました。

大塚会長（愛する会）からも「早く出来るように努力したい」と前向きの意見が出され、渡邊事務局長（愛する会）から「今日は、思いもよらず多くの中高生が参加してくれました。声をかけてみないと次に進まないということがよくわかりました。地域の歩こう会を１月からやりましょう」という宣言が出されて、そのネーミングも「長谷探検隊」と決まって、当日がその発足式ということで全員の確認が行われました。

■　八坂さんから総評。「やろうとしていることを宣伝しましょう」

２時間に及ぶ班別の協議そして全体討議の結果を踏まえて、「愛する会」の八坂さんから総評があり、「長谷探検隊の実行チームの立ち上げを。やろうとしていることを、幅広く宣伝を」と提言をいただきました。

◆　総評　（芝北川を愛する会：八坂さん）◆

- 長谷小学校ＯＢの中学生、高校生が参加して良かった。
- 今回は第 1 回に出された内容を絞り込んだ意見が出され、具体的な話し合いができました。
- 小学校も無くなるということで、長谷地区を何とかしたいという思いはみなさん同じと感じました。意見の中で、自然が豊かで食べ物がおいしい、が将来的な宣伝のヒントになるのではと思っています。
- 長谷探検隊（歩こう会）の発足式ということで、実行チーム立ち上げて、具体的な日程を詰めて貰いたいと思います。
- 情報発信が足りないので、情報誌とか新聞等いろいろ利用しながら、これから私たちがやろうとしている行事をについて、幅広くみなさんと宣伝をしていきたいと思います。

総評を語る八坂さん

総評に続いて、波木（共助研）から今後の活動予定が紹介され、同時に進めている山桜の調査結果とあわせて、来年春に発表会を開催することが提案されました。

さらに、閉会のあいさつとして、針貝会長（共助研）から「友　遠方より来たる　また楽しからずや。・・我々が遠いところから来たという意味ではなくて、我々もみなさんと出会えた。これがいい出会いだという意味です。出会いと活力に満ちた美しい長谷地区、このようなふるさとが作られますように願っています。」と感謝と期待の言葉が寄せられ、２ 時間の熱気に満ちた会の幕が閉じられました。

時刻も遅くなり、翌日のスケジュールも詰まっていることから、会場の片づけを終えた共助研の一行は、早々に三重町のホテルに引き揚げました。チェックインの際に、既に時計は 22 時を指していましたが、初日の余韻さめやらぬ一行は、結局いつもの三重駅前の居酒屋に場を移し、昼間の山桜調査の成果や「話し合う会」での交流の楽しさなどを、閉店を告げられるまで確認し合った次第です。

２．　長谷小学校で、子供たちの大活躍に感激。

■　生き生きと演じる子供たちに、圧倒された「長谷文化祭」

見事に晴れ渡った翌日６日の日曜日は、長谷小学校で開催される最後の文化祭の日でもありました。

三重町のホテルを９時半に出発した一行は、10 時過ぎに小学校に到着しました。既に、校庭を使った「2009　ナガタニ」の人文字作成が終わって、体育館を会場とする「文化祭」が始まっていました。会場では、ステージ前の最前列に、全部で 12 名の児童が座るスペースが確保され、さらにその後ろに子供たちの家族や地域の人々の観客席が用意されて、100 名を超える地域の人々が集まっていました。

ステージでは、１２名の児童と、併設されている幼稚園の園児たちが、全部で 12 の演目を入れ替わり務めており、10 月 17 日に学校施設のことでヒアリングをお願いした米光校長先生も、愛児たちの元気な活躍ぶりを熱心に見守っておられました。

６年生の発表

演題４番目の「みんなが暮らしやすい長谷」では、３人の６年生が、長谷地区の人口推移や高齢化の実態等を紹介しながら、これからの長谷のまちづくりとして、“空き家活用により皆の集いの場づくりを”、“ワンコインバスを走らせて、買い物や通院を便利に” など当地区の抱える問題への解決策を発表してくれ、地区の大人はもとより我々共助研のメンバーも、驚きかつその的確さに深く頷かされました。彼らがそのまま当地区に留まって、これらの課題を片付ける大人に成長してくれればと、切に念じざるを得ませんでした。

４年生による「柴北川物語」

演題５番目の「柴北川物語」では、４年生５人が柴北川に

生息する様々な動物を演じて、清流柴北川の環境を守っていくことの大切さを訴える寸劇を見せてくれました。「愛する会」の大塚会長や渡邊事務局長、さらに多くの会員の方々が目を細めながら見入っている姿が、印象的でした。劇中にでてくる「ナマズの親分」は、某「愛する会」の会長がモデルではないか、という声も一部にささやかれていましたが。

その後も次々に演目が続くなか、演じる子供たちや先生方をはじめとして、子供たちの活躍を見守る地区の人々全員が、この幸せな時間が過ぎていくのを一刻一刻と愛しんでいるようで、この年一度の地区行事を学校閉校後も何らかの形で続けることの大事さを、痛感させられました。

まだ後半の演目が残っていましたが、山桜調査の時間配分も考慮して、共助研メンバーと大塚会長、渡邊事務局長は、後ろ髪をひかれながらも会場を後にした次第です。

体育館の熱狂からぬけ出して校庭に立つと、初冬のすがすがしい日差しが学校全体にふりそそいでいました。

全校生１２名による合奏

演目に見入る地区の人々
（手前に座り込んで見守る校長先生）

初冬の陽光ふりそそぐ長谷小学校の校庭
（左手に体育館。右手の山並に山桜が。）